

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22500763

研究課題名(和文)食育体験を通して小・高・大学生が共に学びあうピア・エデュケーションの実践的研究

研究課題名(英文)Practicing study of the peer education, primary schoolchild - high school student - university student learn each other together through a nourishment education

研究代表者

住田 実 (SUMITA, MINORU)

大分大学・教育福祉科学部・教授

研究者番号：90136771

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、<地域に根ざした食教育内容・教材・方法>とピア・エデュケーションとの相乗的教育効果の追究をめざして以下のような研究を実施した。

まず、本研究のメインテーマである「高校生と児童、及び大学生が共に学びあうピア・エデュケーション(食教育)の継続実践」について、本科学研究費獲得以前から継続している学校現場の過去9年間にわたる実践内容を「教材研究」の視点から考察を加え、その成果をもとに10年目以降の計画を実施した。

事後のアンケート調査により、児童たちは教師よりも、年齢の近い高校生による食育指導にほぼ全員が好意的な感想をもつとともに、生活化への意欲の向上も明らかとなった。

研究成果の概要(英文)： Since putting it in this research, the following study was put into effect aiming at investigation of the multiple educational effect with< the food education contents, the course and the way rooted in an area> and the peer education.

First the practice contents for the past for 9 years in the school site continued from this scientific research fund acquisition before about "continuation practice of the peer education a high school student, a child and a college student learn each other together (food education)" when this research is a main theme, consideration is added from the angle of "instructional material study", the outcome, and, after the 10th was planned.

All the members had favorable impressions in shokuiku guidance by the high school student from whom the age is closer than a teacher mostly for children by an ex post fact questionnaire survey as well as improvement of the will to life-ization also became clear.

研究分野：健康教育学

キーワード：食教育 食育 食育教材研究 食育体験 学校栄養教育 ピア・エデュケーション

1. 研究開始当初の背景

筆者は、2002年より8年間にわたって「高校生が地元の出身小学校を訪問」することによって「調理実習も含めた食育」を実践するというきわめて興味深い継続研究に取り組んでいる。筆者はその初年度より支援者として双方の学校を継続訪問し、とくに高校生には年間で計2週間に及ぶ指導・支援を担当している。

これまでの継続研究の成果は簡単ながら報告しているが、その特色をまとめると次の5点があげられる。

【注】(住田 実：子どもたちの健康認識を高め自立を支援する健康教育の新たな“学び”を追って～＜異年齢・同世代の仲間集団＞が育む豊かな学びあいの可能性～、『健康教室』56巻9号、2005)

- (1) 高校生が地元の小学校を訪問して健康教育を行うというピア・エデュケーションの形態。
- (2) 毎年度ごとの指導内容・教材づくりの「積み上げ」による児童への好影響。訪問指導の「導入」では、昨年度の内容を知らない1年生児童のために「ダイジェスト劇」を挿入。
- (3) 同時に、高校生が「小学校児童にもわかるような教材づくり」や「話し方」を自主的に学ぶ過程で、食教育をめぐる認識の深まりと学習効果はきわめて高い。
- (4) 「保健劇」のあとに続く「食べる授業」での食材は、児童たちが学校の教育課程での「生活科」「総合的な学習の時間」において栽培した作物を使用。このことにより、地産地消からさらに食物に対する愛着と興味が芽生えるという効果を生む。
- (5) 上の3点目と関わって、児童に「わかりやすく教える」ために「自発的に学ぶ」という経験を通した高校生

たちの中からは、保育、教育、栄養関係の進路に進み、卒業後も訪問指導の支援にあたる人材も輩出するなど、当初は消極的だった生徒たちの目を見張る変容も見られる。

大分合同新聞(朝刊)2008年(平成20年)2月29日 金曜日



『大分合同新聞』2008年2月29日

その成果は、西日本地区の食育関係者を対象にしたシンポジウム(岡山県立大学保健福祉支援センター主催/第4回晴れの国鬼ノ城シンポジウム:これからの「食育」への提言/コメンテーター:足立己幸氏)において、高校生と児童による「地域に根ざした食育の実践例」として紹介され、とくに栄養教諭、学校栄養職員を中心に反響を呼んだ。

http://www.oka-pu.ac.jp/page/hokenhukushi_shien_center

本研究は、その9年目から5年間にわたる継続実践として位置づけられる。

そこで、まずは本研究において、「ピア・エデュケーション」に着目した研究上の経緯について述べておきたい。

●食教育をめぐる2つの観点

——「系統的な食と健康の科学」と「＜地域に根ざした＞特色ある教育内容・教材・方法」

(1) 系統的な食と健康生活の科学

国民の健康課題としての生活習慣病の増加やメタボリック・シンドロームへの基本的な対応策としての「食教育」は、栄養教諭制度の創設や「食育基本法」の成立、さらには

「食育推進基本計画」（内閣府）の発表を持ち出すまでもなく、とりわけ将来を担う児童生徒を対象とした「効果的な食教育プログラム」の必要性とそれへの期待はますます高まっている。そのような中で2006年に厚生労働省・農林水産省によって公表された「食事バランスガイド」は、食教育の指導内容を総括的かつ簡潔な指針としてまとめたものといえ、もちろん従来の家庭科、保健体育科(保健分野)における「食生活」関係の教育内容も系統的な「食と健康生活の科学」を体現した教育課程として重要な意義を有していることは無論である。

(2) <地域に根ざした食育実践研究>としての高校生と児童による「ピア・エデュケーション」への着目

その一方で、多様な教育アプローチを目指す視点から、近年の「地域の時代」を反映して「地産地消」を生かした教育プログラム(取材活動や調理実習 etc.)も脚光を浴びている。それはいいかえれば、各々の個人がその地域に生きているならば、<地域に根ざした観点>から独自の食育の展開がなされるべきという立場であり、まさにこの2つの観点は<相互補完的>かつ有効な相乗効果が期待されると思われる。

それに加えて、健康教育の現場では、「教師や親、あるいは専門家による一方的な指導型の健康教育では一定の限界がある」ことが度々指摘されてきたが、その1つの打開策として「ピア・エデュケーション」が注目されていることは周知の通りである。といっても、ピア・エデュケーションは、従来の教育方法に唯一無二のものとして提案されたものではなく、多様な教育的アプローチが追究される中から生まれた1つの有力なアプローチに過ぎない。しかしながら、その効果に関しては、広く性教育、薬物乱用防止教育などで目覚ましい効果が立証されており、「この手法は、思春期の人々の主体的な行動変容を支え

るために有効な方法であるとWHOはじめ、国際的レベルで高い評価を得ている」(高村寿子、ピア・カウンセリングで進める健康教育の可能性、健康教室、56巻9号、1995)といわれる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、<地域に根ざした食育の効果的な展開>において、ただ単に「教師から児童生徒に食育内容・教材を伝達する」だけではなく、1つは比較的年齢に近い「ピア(仲間集団)」、すなわち「児童－高校生同士の学びあい」という近年の教育界で注目の学習形態を導入するである。

さらに、これまで8年間にわたり継続してきた「児童－高校生」の実践に加えて、さらに今回は「将来の食育を担う教師志望の大学生」を授業参観者としてピア集団(学習者)に組み入れることで、「教員養成課程における食育の力量形成のあり方」も含めた「食育ピア・エデュケーションの意義と可能性」について追跡事例研究を実施する。

3. 研究の方法

本研究においては、小学生・高校生・大学生(未来の教師の卵)が「食育体験」をとおして<地域に根ざした食育学習>を展開することによる教育効果を「ピア・エデュケーション」による相乗的教育効果の観点から追究するために、平成22年度においては以下のような研究を計画する。

まず基礎研究①として、<地域に根ざした食育実践>の先行研究動向と課題について、内外の研究者による研究成果を文献的に明らかにする。同時に基礎研究②として、「ピア・エデュケーション」に関する内外の基礎的先行文献を収集し、研究課題を明らかにする。

一方、本研究テーマの柱の1つである「ピ

ア・エデュケーション」の実際の教育現場における実践状況について、国内におけるピア・エデュケーションの先進実践校の「取材」や公開授業研究会に参加するとともに、授業実践の記録並びに教材資料を収集する。

上と並行して、「小学生—高校生—大学生(未来の教師の卵)」によるピア・エデュケーション交流のうち、過去9年間にわたって続けてきた「小学生(佐田小)—高校生(安心院高)」の実践に加えて、「大分大学生(未来の教師の卵)」の参加をどのように組み入れるかについて計画と実践を行う。

4. 研究成果

平成22年より5年間にわたって「地域に根ざした食教育内容・教材・方法」とピア・エデュケーションとの相乗的教育効果の追究を目指した研究を実施した。

研究のメインテーマである「高校生と児童、および大学生が共に学びあうピア・エデュケーション(食教育の継続実践)」では、教材・授業研究の視点から児童・高校生、及び授業を参観した大学生へのアンケート調査より「食をめぐる意識や行動の変化」を中心に分析を実施した。



このグループは児童4名に高校生4名の編成

とくに検討内容としては、年齢に近い者同士(児童と高校生)が行う食教育の展開は、年齢の離れた教員が行う指導よりもどのような点について効果が認められるかについてアンケート調査を分析するとともに、児童・高校生・教員に対する「聞き取り調査」

を実施した。

その結果、以下のような感想がきわめて多くの児童より寄せられた。

「わかりにくいことは高校生のお姉さん、お兄さんたちへのほうが、何でも聞きやすい」

「頭をなでてくれたり、ほめながらやさしく教えてくれるので勉強が楽しい」

「何度も言葉や表現をかえてていねいに教えてくれるので、食の勉強が楽しく、わかりやすかった」

「あとで教科書を見たら、高校生のお姉さんたちから習った内容が出ていたので、教科書をみなおすことで勉強したことがわかった」

「教科書だけを読んでも、よくわからなかったことが、5人のグループに3人のお姉さんとお兄さんがついてくれたので、何でも聞いてよくわかった」

【注】以上の引用は、ひらがな記述を漢字に換えている。



興味深いことに、9割以上の児童が上のいずれかに関わる感想を自由記述として述

べていた。

これらの点について、参観した大学生のみならず、小学校側、高校側の教員とも相互に意見交換を実施したが、地域における学校として可能な限りピア・エデュケーションを実施することは、食に関する意識を高める効果にとどまらず、児童にとっての自己肯定感の向上、さらには高校生にとっても学校や教師側からの感謝の言葉が食の学習に対する満足感や自己肯定感につながっていたと観察評価された。

すなわち、高校生が行った食に関する指導の内容は、学校の教科書内容（食生活における栄養バランスと健康）とほぼ同一であるにもかかわらず、児童、高校生の双方にとってきわめて有意義で心に残る学習活動であったことが明らかとなった。



といっても、小学校の児童に対して、常に中学生や高校生がゲストティーチャーの役割を期待することは現実的ではないことは述べるまでもない。以上の実践も、年1回の継続実践である。しかしながら、貴重な機会であるにもかかわらず、担任教員の意見としては、その後の学級指導においても、折りに触れてゲストティーチャーの食育内容を取り上げているという。そこで、例えば、同じ小学校段階においても、ピア・エデュケーションの観点からは、高学年と低学年の組み合わせという形式も考えられよう。また、中学・高校生においても、同様の形式もあり得ると思われる。

一般に従来の食に関する授業・教材研究の

あり方は、「教師—子ども」の関係を中心として、主に教師の指導力に力点を置いた授業改善が検討されてきたが、本研究におけるピア・エデュケーションの継続実践の成果は、従来の研究対象に「年齢の近い子ども集団による相互の学びあい」という新しいジャンルによる教育効果の大きな可能性を示したといえる。今後のますますの関連研究の蓄積が期待される場所である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 住田 実: “疑問”の芽生えと“問いかけ”の追究過程を大切にする健康教育を創ろうⅤ、(査読・無)、健康教室、65巻9号、pp.4~10、2014年
- ② 住田 実: 子どもたちの健康認識を育む教材・授業づくりの4つの局面～「どこから手をつけようか」「なぜか教材・指導案づくりが進まない」と悩むとき～、(査読・無)、健康教室、63巻9号、pp.4~11、2012年
- ③ 住田 実: 疑問の芽生えと「問いかけ」の追究過程を大切にする健康教育を創ろうⅣ、(査読・無)健康教室、62巻9号、pp.4~8、2011年
- ④ 住田 実: 再び、子どもたちの健康認識を育む<ヨコ糸(年間計画・指導)>と<タテ糸(学年進行)>を紡いで～「教える」ことによって「学び」「成長する」児童と高校生たちのピア・エデュケーションの追跡事例から～(査読・無)、健康教室、61巻9号、pp.4~14、2010年
- ⑤ 池田雅子・住田 実・永井成美、他8名: 視覚と味覚から学ぶ食教育プログラムの展開～野菜摂取をテーマとした「食べる授業」の実践と児童への効果～、(査読・有)、栄養学雑誌、68巻1号、pp.51~58、2010年
- ⑥ 住田 実: はてな?と不思議に満ちたからだ健康の小宇宙の旅を続けて、(査読・無)、健康教室、61巻6号、pp.10~19、2010年

[学会発表] (計8件)

- ① 住田 実: 【特別講演】養護教諭の専門性を生かした「生きる力」を育む健康教育の進め方～学校・家庭・地域を結ぶ「心に響く学び合い」の組織づくりを考える～、平成26年度全国養護教諭研究大会、2014年8月7日、iichik

- 総合文化センター（大分市）
- ② 住田 実：【講演】栄養教育におけるクイズの発想と映像教材の工夫、平成 25 年度 食未来エクステンション講座・エキスパートコース、2013 年 11 月 15 日、兵庫県立大学ホール（兵庫県姫路市）
 - ③ 住田 実：【講演】見て、感じて、驚いて再発見！ 瞳が輝く歯・口・食の健康教材づくりの発想 ～教材研究の視点と方法から～、平成 25 年度愛媛県「学校歯科医生涯研修制度」基礎研修会、愛媛県歯科医師会館、2012 年 3 月 31 日（愛媛県松山市）
 - ④ 住田 実：【講演】見て・聞いて・驚いて再発見！...おもしろ大実験と物語で学ぶ「食とからだと生活リズムの秘密」、第 2 回福岡県特別支援学校給食研究協議大会、2012 年 11 月 10 日、福岡県立直方特別支援学校（福岡県直方市）
 - ⑤ 住田 実：【シンポジスト】～シンポジウム「学校へ行こう！～学校、家庭とともに推進する健康教育と学校歯科医の在り方」歯・口の健康づくりを通じた楽しい健康教育の発想と展開～教材研究（視聴教育）の視点から～、第 62 回全国学校歯科医協議会、2012 年 11 月 20 日、KKR 熊本（熊本市）
 - ⑥ 住田 実：【教育講演】見て・聞いて・驚いて再発見...おもしろ大実験で学ぶ「朝食と生活リズムの秘密、小千谷市・十日町市・魚沼市養護教諭研修会、2012 年 8 月 5 日、小千谷市民会館（新潟県、小千谷）
 - ⑦ 住田 実：【教育講演】見て・聞いて・驚いて再発見！...<おもしろ大実験>で学ぶ楽しい健康教材づくり、2012 年 8 月 6 日、柏崎市教育センター（新潟県柏崎市）
 - ⑧ 住田 実：【指定発言】ヘルスプロモーション研究における Child-To-Child について、第 8 回日本ヘルスプロモーション学会、2010 年 11 月 25 日、福岡市民会館（福岡市）

〔図書〕（計 5 件）

- ① 住田 実：第 6 次改定・学校保健ハンドブック、（分担執筆：第 6 章-1 学校における食に関する指導の進め方）ぎょうせい、pp.113～117、2014 年
- ② 住田 実：平成 26 年度・全国養護教諭研究大会抄録、（分担執筆：養護教諭の専門性を生かした「生きる力」を育む健康教育の進め方～学校・家庭・地域を結ぶ「心に響く学び合い」の組織づくりを考える～）、文部科学省、pp.18～22、2014 年
- ③ 住田 実：平成 26 年度・全国養護教諭研究大会報告書、（分担執筆：養護教諭の専門性を生かした「生きる力」を育む健康教育の進め方～学校・家庭・地域を

結ぶ「心に響く学び合い」の組織づくりを考える～）、文部科学省、pp.15～21、2014 年

- ④ 住田 実：（健康教育学監修）、子どもが変わる生活を変える・食教育 4 つのステージ～ライフスタイル変容のための食教育プログラムの実際～、東山書房、全 230 ページ、2011 年
- ⑤ 住田 実：（農林水産省・編）子どもが変わる・地域が変わる・教育ファーム事例集（分担執筆／これからの学校教育を担う未来の教師たちに教育ファームを）、農林水産省・消費安全局、pp.104～109、2011 年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

住田 実 (SUMITA MINORU)
大分大学・教育福祉科学部・教授
研究者番号：90136771